

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：35309

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00224

研究課題名（和文）福祉領域における実験音楽を使用した音楽活動の意義に関する研究

研究課題名（英文）Research on the meaning of musical activities using experimental music in the welfare field

研究代表者

田中 順子（Tanaka, Junko）

川崎医療福祉大学・リハビリテーション学部・教授

研究者番号：70299262

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、実験的音楽活動の特性解明、実験的音楽活動の福祉領域的意義、実験的音楽活動のプログラム開発等であった。参加者のインタビュー調査や毎回の映像分析等により研究を進めた。活動内容は自由即興を主とした。その結果、実験的音楽活動は、従来の音楽活動で多用される馴染みの音楽・規律的音楽とは異なり、失敗の回避を可能とし、音楽的素養がない人も誰もが参加できること、音楽自体が非日常的な「異質性」に特徴づけられることが解明された。自由度の高い即興からなる実験的音楽は、自己の解放を可能とし、参加者の肯定的思考・行動変容をもたらした。これは従来の福祉領域の音楽活動では不可能であり、本研究の意義を認める。

研究成果の学術的意義や社会的意義

音楽の医療福祉的利用では、一般的に近代西洋音楽様式の親しみやすい情動中心の音楽活動が主流であり、論文も多数報告されている。しかし、自由即興やノイズミュージック等の実験的音楽活動は福祉領域での実施も少なく、その効果や意義に関する研究は国際的にも解明されていない。

本研究成果により、実験的音楽活動の有用性は、一般的な音楽活動のように一時的な楽しみの提供にとどまらず、思考・行動変容をも可能にすることが解明された。このことの学術的意義は高いと考える。またプログラム開発は実験的音楽活動の普及・促進に貢献し、福祉領域における音楽ジャンルの拡大は利用者に益することでも大であり、社会的意義も高いと考える。

研究成果の概要（英文）： The objectives of the study were to clarify the characteristics of experimental music activities, the meaning of experimental music activities in the welfare field and the development of programs for experimental music activities. The research was conducted through interviews with the participants and video analysis of each session. The activities were mainly based on free improvisation. As a result, it was clarified that, unlike the familiar and disciplined music often used in conventional music activities, experimental music activities enable the avoidance of failure, anyone can participate, even those with no musical background, and the music itself is characterised by an unusual 'heterogeneity'. Experimental music, consisting of highly free improvisation, made possible the liberation of the self and led to positive thought and behavioural changes. This is not possible in conventional music activities in the welfare field, and the significance of this study is acknowledged.

研究分野：精神障害領域作業療法

キーワード：実験的音楽 福祉領域 地域 音楽活動

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

音楽の医療福祉的利用は、音楽療法等の分野では国内外を問わずさかんに行われている。そこでの音楽活動の大半は、一般的に近代西洋音楽様式の親しみやすく情動中心の音楽活動（以下、一般的音楽活動）が主流である。一方、ミュージシャン主導では自由即興やノイズミュージック、図形楽譜等の実験音楽が使用されている音楽活動（以下、実験的音楽活動）も多く、両者の方向性は異なっている。

実験音楽の美学的特徴として、伝統的音楽技術にこだわらない非技術性、非情動性、完成度こだわらない実験性が挙げられるが、こういった自由度の高さが精神・発達障害者の存在肯定を高めるためのリソースとして意義があると考えられた。しかし、世界的にも実験的音楽活動の効果や意義に関する研究は見聞されておらず、実践の実態や有効性が解明されることが望まれる状況であった。そのため本研究により検証を行う必要性があると考えた。

2. 研究の目的

(1) 実験的音楽活動の実態調査

国内外の地域で実践されている実験的音楽活動の内容、対象者等が不明であったため、実態を把握し解明することを目的とした。

(2) 実験的音楽活動の特性の解明

実験的音楽活動の特性が明確化されていなかったため、実験的音楽活動と一般的音楽活動の特性を比較し、実験的音楽の福祉領域における有効性を検討することを目的とした。

(3) 効果判定のための調査

エビデンスに基づく実験的音楽活動の効果を判定することを目的とした。

(4) 実験的音楽活動の福祉領域的意義の検討

福祉領域における実験的音楽活動の個人的意義および社会的意義を検討することを目的とした。

(5) 実験音楽を使用した音楽活動のプログラム開発

実験的音楽活動を広く一般に普及促進するために、有効なプログラムを開発することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 実験的音楽活動の実態調査

以下の計画で実施予定であったが、COVID-19の影響下にて実施を断念せざるを得なかった。

実験音楽を用いている活動団体を文献、インターネット等から抽出し、活動を視察し、活動概要、音楽様式、具体的方法、対象者およびその反応等についてインタビューを行う。調査結果を分析し整理する。

(2) 実験的音楽活動の特性の解明

報告者らが、精神・発達に問題を抱える人を含む一般市民を対象者に、2名のミュージシャン（研究協力者）が交代で主導する実験的音楽活動を毎月定期的に地域で実施した。セッションの様子を毎回ビデオカメラで録画し、参加者らの感想を毎回ヴォイスレコーダーで録音した。映像データは作業療法学の作業分析技法を参照し、実験的音楽活動および一般的音楽活動の作業特性を抽出して比較検討した。音声データは逐語録化して質的データとして分析対象とした。

(3) 効果判定のための調査

毎回の感想録音とは別に、継続参加している2名の参加者に対して、継続的に参加する意味や自分自身について感じられる変化について、個別的・反構造化インタビュー調査を実施した。インタビュー内容はすべて録音し、音声データを逐語録化したものを分析対象の質的データとしてSCAT(Steps for Coding and Theorization)による分析を行った。規定の手続きを経てストーリー・ラインを記述し、それに基づいた理論記述を行った。

(4) 実験的音楽活動の福祉領域的意義の検討

参加者のインタビュー調査に加えて、実験的音楽活動を主導するミュージシャン2名とサブリーダーとして参加している作業療法士1名（報告者）に対して、フォーカス・グループ・インタビュー調査を研究分担者が実施した。インタビュー内容と方法は、ミュージシャンに対してはセッション実施に当たっての準備、意図、参加者との関係性について、作業療法士に対しては作業療法士の役割について、半構造化インタビュー調査を実施した。インタビュー内容はすべて録音

し、音声データを逐語録化したものを分析対象の質的データとした。質的データは、参加者へのインタビューで得られた結果を参照しつつ、ミュージシャンの準備、意図、参加者との関係性および作業療法士の役割について整理を行った。

(5) 実験音楽を使用した音楽活動のプログラム開発

毎月実施した音楽活動プログラムは、毎回その内容を詳細に文書化して記録し、実施した音楽内容および参加者の反応等についてミュージシャンと作業療法士で考察した。

4. 研究成果

(1) 実験的音楽活動の特性

実験的音楽活動と一般的音楽活動の特性を比較した結果を表 1 に示した。

本研究では福祉領域における音楽活動ということで、病院内・施設内ではなく、地域で実践する設定とした。

分析の結果、実験的音楽活動は、一般的音楽活動で推奨されてきた「馴染みの音楽」とは真逆の、「異質な音楽」と自由度の高い「即興音楽」に特徴づけられることが理解された。ルールの上で成立している楽譜に従って演奏する再現音楽とは異なり、実験的音楽はルールがないため失敗を回避できることも解明された。

以上のような特性は、失敗への恐れが強い、対人緊張が高いといった人々の参加を容易にする利点であると考えられた。

表 1. 一般的音楽活動と実験的音楽活動の比較

	一般的音楽活動	実験的音楽活動
モデル	医学モデル 個人モデル	(社会モデル)
目的	治療	楽しむ体験
使用音楽	馴染みの音楽、再現音楽	異質の音楽、即興音楽
実践者	作業療法士、音楽療法士他	ミュージシャン
対象者	障害者	多種多様な人々
場所	病院・施設内	地域

(2) 実験的音楽活動の福祉領域的意義

失敗がないという実験的音楽活動の特性により、参加者は安心して演奏することが可能となり、次第に自己表現を試みるようになった。それにより自己を解放することが可能となり、社会的規範の呪縛から解放されたり自己肯定感が高まったり等の変化が確認できた。一般的音楽活動は一時的な楽しみの提供や機能訓練的要素は満たすかもしれないが、実験的音楽活動は思考や行動にまで肯定的変容を生じさせることが解明された。

Turner¹⁾は、意識と無意識との境界、日常と非日常との境界という意味で liminality という概念を用い、liminality 状態が因習や固定化された生活を崩壊される作用があると述べている。音楽療法士の Ruud²⁾はそれを援用して音楽療法における即興の意義を論じている。田中³⁾も、「日常的な娯楽では、人の心にある種の安心感や楽しみはもたらすものの、何らかの根底から人を大きく突き動かすような力は得られない」と述べ、liminal な活動の重要性を強調している。つまり、実験的音楽活動が有する異質性との遭遇は意識を容易に飛び越え、未知との自分との出会いを可能にすると考えられた。

(3) 実験的音楽活動のプログラム開発

毎回の実験的音楽活動の記録を参考にプログラムを開発した。表 2 にその一部を示す。ここでは「音楽」の範疇を超えた活動も存在するが、音楽という枠を飛び越えることにも意味があるという考えのもとで提示している。

表 2 . 実験的音楽活動のプログラムの一例

プログラム名	実施内容
インスタレーション	光、影、音、紙、パフォーマンス。照明を消し、天井からたくさん紙を吊り下げた空間で、セロハン・ペットボトル・楽器・声・身体表現等を用いて影絵、フリーインプロゼーション、創作ダンスを行なった。
ソングライティング	G7の開催に合わせてテーマをG7とした。アルファベットのGから始まる言葉を参加者が7つあげ、それを元に歌詞を全員で作成し、ミュージシャンが即興でメロディーを付けて全員で歌った。
イムズ音頭	ピアノの黒鍵のみを使用して参加者が1音ずつ音を選び、基本のモチーフを作成した。それを元にミュージシャンが音頭を作曲した。参加者が音頭に合わせて踊りを創作し、最後は全員で歌い踊った。
心を鎮める音楽	ミュージシャンは照明を消し、部屋の床に寝転んだり壁にもたれかかったりしてリラックスできる姿勢を取って閉眼するよう指示した。参加者は好みの楽器や声を用いて静かな音を即興で演奏し、音の響きに聴き入った。
ミニ講義	「反出生主義」についてミュージシャンD氏より講義。以前参加者の一人から「産んでほしくなかった」という発言があったことを受けて、今回の講義となった。反出生主義の意味、種類、解釈の違い等を、哲学・宗教・文学の各観点から取り上げた。最終的にはD氏自身による反出生主義の否定で講義を終えた。それが救いとなったという感想が参加者からあった。

(4) その他

毎月の実験的音楽活動における参加者らの変化を研究成果として記録するため、映像作家による1年半による撮影を経て、ドキュメンタリー映画を制作しDVD化した。

< 引用文献 >

- 1) Turner, V. "Liminality and Communitas," in *The Ritual Process: Structure and Anti-Structure* (Chicago: Al<line Publishing, 1969), pp. 94-113, 125-30.
- 2) Ruud, E., *Music Therapy: Improvisation, Communication, and Culture*, Barcelonna Pablishers, 1998, pp. 117-140 .
- 3) 田中順子, 田島明子編著, *存在を肯定する作業 .「存在を肯定する」作業療法へのまなざし*, 三輪書店, 2014, pp84-108 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田中 順子	4. 巻 18
2. 論文標題 作業療法の新たなアイデンティティ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 臨床作業療法NOVA	6. 最初と最後の頁 33-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 田中 順子
2. 発表標題 シュルレアリスムは心の問題を解決するか？ —リハビリテーション領域における芸術活動の課題—
3. 学会等名 日本音楽即興学会第14回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Junko Tanaka
2. 発表標題 Significance and Problem of Community-based Music Activities in Occupational Therapy
3. 学会等名 2nd COTEC-ENOTHE CONGRESS 2021（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Junko Tanaka
2. 発表標題 Music as a Tool for Self-liberation
3. 学会等名 The OSE Conference 2023（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中 順子, 若尾 裕, 岩本象一, 吉川寿人
2. 発表標題 ワークショップ イムズミュージック がもたらしたもの
3. 学会等名 日本音楽即興学会 第15回大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	沼田 里衣 (Numata Rii) (10585350)	大阪公立大学・大学院文学研究科・准教授 (24402)	
研究分担者	三宅 博子 (Miyake Hiroko) (40599437)	国立音楽大学・音楽学部・准教授 (32611)	
研究分担者	田島 明子 (Tajima Akiko) (80550243)	湘南医療大学・保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻・教授 (32728)	
研究分担者	竹内 いつ子 (Takeuchi Itsuko) (30760665)	川崎医療福祉大学・医療福祉学部・講師 (35309)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------